

## 『紫式部日記』首欠説批判

久保朝孝

現存『紫式部日記』は、寛弘五年七月(1)から寛弘七年正月までの記事を有しているが、その冒頭部に先行する何程かの記事の存在の有無をめぐって、未解決の問題を抱えている。今仮にそれを首部と呼んでおくが、首部の欠落を主張する説は、主に外部徴証よりするものであって、次の四点がその主な根拠としてあげられている。

△一▽ 『紫式部集』古本系諸本卷末に付載されている「日記歌」と称する歌群十七首中冒頭に、寛弘五年五月五日の土御門第法華三十講五巻の日に関係のある和歌五首が存在すること。(2)

△二▽ 藤原定家の『明月記』貞永二年三月二十日の条で、故齋院式子内親王が描いた月次絵の説明の中に、現存日記には見えない筈の、「五月紫式部日記」なるものが記されていること。(3)

△三▽ 『栄花物語』巻第八「はつはな」寛弘五年記事の七月以降分が、『紫式部日記』を粉本としたものであることは既に明らかにされているが、それ以前の記事にも△一▽にあげた「日記歌」冒頭五首と同一素材の記事があり、その文章も『紫式部日記』のそれと共通した性格を有すると見られること。(4)(5)

△四▽ 了悟の『幻中類林』「光源氏物語本事」の中に、

左衛門督とのゝむめのはなさきてのゝちのみなればやすきものとのみ人のいふらんと家の日記にみえたり(6)

という一文が存在するが、ここで言う「家の日記」を『紫式部日記』と考え、これが現存日記中の道長と式部との歌の贈答（「すぎもの」と名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ」「人にまだ折られぬものをたれかこのすぎものぞとは口ならしけむ」）記事に接続するものと考え、さらに左衛門督を藤原公任と考えたと、この段は寛弘五年六月頃か、乃至はその年以前の同じ季節のものと考えられること。(7)

これに対して、首欠を認めない立場、すなわち現存日記冒頭部をもって起筆されたものと見る説は、主に内部徴証よりするものであって、次の二氏の見解によって代表される。

△一▽ 「この冒頭の文章は、この日記の主題の中宮御産という事件を描くに適切な威厳と感覚の繊細と詞藻の洗練をもって、その時処位・環境、主人公中宮の御性格、それに仕える筆者の讚仰

と心境を簡潔に描いていて、この日記の序曲としていかにもふさわしいのである<sup>(8)</sup>という岡一男博士の見解。

△二▽ 現存日記の最初の部分を、日記全体の大きな回想の発想の冒頭として把握する益田勝実氏の見解<sup>(9)</sup>。

右のように、首欠の有無をめぐる両説は相拮抗して、未だその解決がなされていないのである。「外証からすれば首欠説に、内証からすればその反対説に、それぞれ加担しなければならぬ」という矛盾、これを素直に認めた上で、両者をいかに統一するか<sup>(10)</sup>という問題に対して、種々の試案がこれまで提起されてきたが、十分に説得力を有する解答は、未だ示されていない。この作品の形態を考える上で、この問題はどうしても黙過し得ないことでもあるので、以下私の考えを述べてみたい。

## 1

まず、首欠説の論拠について、逐次批判検討を試みることにする。

古本系『紫式部集』巻末付載「日記歌」の素姓については、何人かが古本系『紫式部集』と『紫式部日記』とを同時に手にして、その両者を比較し、前者に漏れている「日記」の歌を後者より抽出し、その巻尾に追記補入したものと、現在では考えられている<sup>(11)</sup>。そうすると、

「日記歌」全十七首中冒頭の五首が、現存日記の冒頭部に示された時間と先行する行事、すなわち寛弘五年五月五日に催された土御門第法華三十講五巻の日に関係のある歌であることから、現存日記冒頭部に

先行する記事の欠落が考えられることになるわけである。ここで最も問題になるのは、「日記歌」が依拠したと考えられる資料の推定が妥当であるかどうかという点である。

実はこの問題については、既に「古本系『紫式部集』巻末付載「日記歌」考」(『古今事類考』古事類考) 物語・日記文学とその周辺 昭55・9所収)と題して私の考えを公にしてあるので、ここではその結論の概略を記し、また第2項以降での検討資料でもあるので、「日記歌」冒頭五首及びそれに対応する定家本系家集歌を掲載するにとどめたい。

定家本系家集(66)と古本系家集付載日記歌(一)と(二)との詞書を比較すると、共通本文の存在からは同一の原資料を、しかし独自本文の異質性からは、異なった二つの原資料を想定せざるを得ないのであるが、それは同一素材を元にはしながらも、与える相手との関係や親密度の深淺、また相手の性格や教養等を勘案して、作者自身によってつくられた別々の小品、仮称「日記的小家集」にそれぞれが依拠したための現象であると考えることによって解決できる。そして、「日記歌」は、この「日記的小家集」の一種(一)と(二)と、現存「紫式部日記」(六)と(七)と、『後拾遺和歌集』(七)とを資料として追補されたものと考えられる。したがって「日記歌」冒頭五首の存在に立脚する首欠説の論拠△▽は、その依拠したと考えられる原資料の推定に対する疑義から、正当なものとは認め難いということになるのである。

——古本系『紫式部集』巻末付載「日記歌」——

※本文及び番号(漢数字)は、南波浩校注『紫式部集』(岩波文庫、古本系の底本は陽明文庫蔵本)校訂本文による。

参考に、定家本系家集(翻)に相当するものとして、古本系家集⑥(本文及び番号は岩波文庫本による)を補った。

三十講の五巻、五月五日なり。けふしもあたりつらむ提婆品をおもふに、あし山よりも、この殿の御ためにや、木のみもひろひおかせけむと、思ひやられて

(一) たへなりやけふはさ月の五日とていつつの巻にあへる御法も

いけの水の、たゞこのしたに、かゞり火にみあかしのひかりあひて、昼よりもさやかなるを見、おもふことすくなくば、をかしようもありぬべきをりかなと、かたはし、うち思ひめぐらすにも、まづぞ涙ぐまれける。

(二) かゞり火のかげもさわがぬ池水にいく千代すまむのりのひかりぞ

おほやけごとにいひまぎらはすを、大納言の君

(三) すめる池のそこまでてらすかゞり火にまばゆきまでも憂きわが身

かな

△参考▽

土御門院にて、やり水のうへなるわたどののすのこにありて、かうらんにおしかかりてみるに

⑥ かげみてもうきわが涙おちそひてかごとがましきたきの音哉

.....  
五月五日、もろともにながめあかして、あかうなればいりぬ。

いとながぎねをつゝみて、さしいでたまへり。小少将の君

(四) なべて世のうきになかるゝあやめ草けふまでかゝるねはいかゞみる

返し

(四) なにごととあやめはわかでけふも猶たもとにあまるねこそたえせね

——定家本系「紫式部集」——

※本文及び番号は、岩波文庫本(底本は実践女子大学本)の校定本文による。

土御門院にて、三十講の五巻、五月五日にあたりしに

(66) 妙なりや今日は五月の五日とて五つの巻の合へる御法も

その夜、池のかがり火に、御燈明の光り合ひて、昼よりも底までさやかなるに、菖蒲の香今めかしう匂ひ来れば

(67) かがり火の影もさわがぬ池水に幾千代すまむ法の光ぞ

公ごとに言ひまぎらはすを、向ひたまへる人は、さしも思ふことものし給ふまじき容貌・容姿・齡のほどを、いたう心深げに思ひ乱れて

(68) 澄める池の底まで照らすかがり火のまばゆきまでも憂きわが身かな

やう／＼明け行くほどに、渡殿に来て、局の下より出づる水を、高欄をおさへて、しばし見るとれば、空の景色春秋の霞にも霧にも劣らぬころほひなり。小少将のすみの格子をうちたたきたれば、放ちておし下したまへり。もろともにおりて、ながめたり。

(69) 影見ても憂きわが涙落ち添ひてかごとがましき滝の音かな

返し

(70) 独り居て涙ぐみける水の面にうき添はるらむ影やいづれぞ

明かうなれば入りぬ。長き根を包みて

(71) なべて世の憂きに泣かるるあやめ草今日までかかる根はいかが見  
る

返し

(72) 何事とあやめは分かで今日もなほ袂にあまるねこそ絶えせぬ

## 2

『明月記』貞永二年（天福元年）三月二十日の問題箇所は、次の通りである。<sup>(13)</sup>

……典侍往年幼少之時、令參故齋院之時、所賜之月次絵二卷、  
年来所<sup>持也</sup>、今度進入宮、詞同彼御筆也、垂露殊勝珍重之由、上皇有仰事  
云々、件絵被書十二人之歌、<sup>被分</sup>正月、<sup>敏行</sup>二月、<sup>藤少納言、齊信卿、</sup>  
三月、<sup>天曆藤</sup>四月、<sup>東方</sup>五月、<sup>紫式部日記</sup>六月、<sup>葉平朝臣、秋</sup>七月、  
<sup>後冷泉</sup>院御製、<sup>虫声</sup>八月、<sup>和泉式部</sup>九月、<sup>帥宮町門</sup>十月、<sup>馬内侍</sup>十一月、<sup>宗貞少将、未</sup>  
十二月、<sup>四条大納言</sup>二卷絵也、表紙、<sup>有給、青紗緯</sup>軸、<sup>水精</sup>……

このうち、「五月<sup>紫式部日記</sup>」の二行割注の意味が（五月の歌は）紫式部の作で、紫式部日記に描いた五月の暁の景気」と解釈されるとするならば、これは現存日記には見えない寛弘五年五月五日から翌六日早暁にかけての部分にほかならず、よって首部の欠落が証明されるとい  
うのが、首欠説の論理である。これに対しては、その解釈を受け入れ  
ながらも、その妥当でないことを主張する岡一男博士の反論がある。  
それは、式子内親王が所謂消息文の後の寛弘六年某月十一日の翌暁の

舟遊び記事（岡博士は、これを六月二十一日のこととする）を五月と  
解して画題としたか、あるいは、一段置いてそれに続く、道長が終夜式  
部の局の戸口を叩きわびた後朝の贈答の模様を絵にしたのだらうとす  
るものであるが、論証の過程に幾つかの無理が重なって見え、その妥  
当性は稀薄であると言わなければならぬ。これに対し、萩谷朴氏は  
解釈に対する異論を提起した。<sup>(15)</sup>それは、「日記」という語の品詞を『紫  
式部日記』を示す書誌・作品としての名詞としてではなく、「日記す」  
「日記せる」というような紫式部の行為を示す動詞として把握して、  
「五月の画題は、紫式部で、日記として書きつけた暁の景気の、歌で  
ある」と解釈するものであり、その「日記し」た作品として定家本系  
家集を推定し、その(72)（「日記歌」(6)）の歌に、(69)の詞書が合せて用  
いられたのがこの歌絵であるとす。したがって、氏は「明月記」の  
この箇所について、「直接には、『紫式部日記』の首欠・非首欠説の論  
証に、なんら発言権を有せぬものとなった」と結論するのである。し  
かしながら、以上のような氏の論にも、二つの点で無理があるように  
見える。

第一に、氏が「平安朝の文学史において、『家の集』が常に広義の  
『日記文学』の範疇に組み入れられ得るものであったことは、『篁集』  
『伊勢集』『本院侍従集』『高光集』『一条摂政集』など枚挙に遑のない  
ほど、多数の例を残している」と言う点は首肯し得るのだが、『紫式部  
日記』と『紫式部集』との両書を手にし、それぞれに何らかの関りを  
持っていたと見られる定家が、氏の言われるような、家集に依拠した  
と見られる月次絵の歌について、名詞であれ動詞であれ、誤解を招く

恐れのある「日記」という語を用いたかどうかは、甚だ疑問である。

第二に、五月の絵に記された歌を、定家本系家集<sup>72</sup>の五月の菖蒲に  
関連した歌とし、しかしそれだけでは「晝景気」という情趣を汲み取  
ることはできないから、<sup>69</sup>の詞書を「あわせて用いた」とする点であ  
る。いったい、「あわせて用いた」とはどのような形態を指して言う  
のかが判然としない。<sup>69</sup>の詞書に<sup>72</sup>の歌を接続させたということなの  
か、あるいはまた、家集<sup>69</sup><sup>71</sup><sup>72</sup>をそのまま記載したということなの  
かが全く不明なのである。しかし、もし前者ならそれは恣意による改  
変ということになるし、詞書と歌との接続も全く不自然になるので、  
殆ど想定不可能である。また後者にしても、四首の詞と歌との記載と  
いうのは、量的に過多であると言える。思うに、五月の菖蒲という歌  
材を重視したために、右のように曖昧な形態が想定されてしまったも  
のであらう。

次のように考えてはどうか。ここは「紫式部日記晝景気」が画題な  
のであるから、家集<sup>69</sup>の詞書中の「空の景色春秋の霞にも霧にも劣ら  
ぬころほひなり」という一文をこそ重視すべきであつて、画題の表現  
も、この一文より出たものと考えるのが自然であらう。したがつて五  
月の絵に記された歌は、<sup>69</sup>の「影見ても憂きわが涙落ち添ひてかごと  
がましき滝のおとかな」を考えるのが最も穏当なのである。また、こ  
の歌は式子内親王自身の詠歌傾向に相似しているようにも思われる。  
「式子内親王の抒情の芯には、つねに現実に対する断念と諦観に棹さ  
す自閉的鬱情があつた」と言われるが、<sup>69</sup>の歌の主題はそのような彼  
女の心情に一致するものがある。また、内親王の歌に「ながむ」の語

が多用されていることについては既に諸家の指摘するところであり、  
「虚構によるのではなくて、憂愁を歌いあげる契機となるものが『な  
がむ』であつた」と言われるが、<sup>69</sup>の詞書の終わりに「もろともに下  
りゐて、ながめたり」と記されて、内心の憂愁を詠出した歌に接続  
していくという詞書と歌との照応の相は、歌自体に「ながむ」の語  
が使用されていずとも、内親王の詠歌展開に極めて類似したものとな  
っていると言えよう。これらの点が相俟て、<sup>69</sup>の詞歌に対する式子内  
親王の関心・選択の眼をひいたものと考えられるのである。

さらに、<sup>69</sup>の詞歌が月次絵記載歌として妥当であることを窺わせる  
材料として、古本系家集<sup>66</sup>に同歌が収載されていることがあげられ  
る。定家本系家集<sup>67</sup><sup>72</sup>に相当する歌としては、この一首のみであ  
る。この歌に後人の増補が考えられることは既に指摘されているが、  
その増補者が依拠した資料は、おそらく定家本系家集増補者、あるいは  
「日記歌」追補者が依拠したそれぞれの資料とそう遠くはない関係  
にあるもの、あるいはそのどちらかそのものであつたであろうとも考え  
られるが、そうすると、定家本系家集七首中「影見ても……」一首の  
みは独立して選択されている点が注目されよう。増補者の食指を誘う  
魅力が特にこの歌にあつたとしか考えられないのである。一首として  
の独立性についてみてみると、この歌が歌が最も強いと言える。増補  
の時期は推定すべくもないのだが、それが内親王の月次絵執筆の前で  
あらうと後であらうと、この歌の独立性を弱めることにはなるまい。

また、<sup>71</sup><sup>72</sup>は「新古今和歌集」(夏、223・224)に入撰しているが、<sup>69</sup>も  
「続後撰和歌集」(雑上、1009)に入撰し、また真観撰「秋風和歌集」

(雑中、1170、初句「影見れば」)にも収載されていることから、この歌が比較的広く享受されていたことが分かる。

以上のように考えると、萩谷氏の説も十分な説得力を持つとは言い難いと思われる。この問題は、前に私が想定した法華三十講五巻の日から翌朝にかけての詠出を素材とした小品との関係から、次のように考えることができよう。「日記」の語は、それが名詞であれ動詞であれ、その指示する書誌形態は萩谷氏が言われるようになら幅広いものを考えてよいと思われる。それは記事の量についても言えることであろう。よって、首欠論のように現存日記よりも時間的に先行する記事をも含む『紫式部日記』(仮に『広紫式部日記』と呼ぶ)を、「日記」の語から推定することも可能ではあるが、同時に一方で、前に想定したような小品をも、やはり「日記」の語から考えることができるのではなからうか。その場合、この小品が私の考えるように独立したものとして享受されていたのか、あるいは当時既に『広紫式部日記』なるものが想定され、その断簡としての扱いを受けて享受されていたのかは不明であるが、どちらの場合も、それは「日記」と呼ばれる可能性を有していたと思われる。したがって、式子内親王の月次絵「五月」に記載されたのは、家集例の詞書と歌とに相当するものであって、その依拠した資料は、定家本系家集増補者が依拠したと同様の、紫式部の手になる独立した小品「日記的小家集」であろうと考えるのである。なお、その資料は『栄花物語』の作者も依拠したと考えられること、下の対照表に示す通りであって、この資料(「日記歌」)追補者が依拠したのとは別種のもの)は比較的広く、流布・享受されて

いたものと思われる。式子内親王は『源氏物語』の伝本に何らかの関係を持っていたらしいが、齋院時代にあるいは『源氏物語』を初めとして紫式部の作品を涉獵することなどがあって、その過程でたまたまこの小品に目を触れるような機会でもあったのかもしれない。

※—線は、『栄花物語』と家集のみにあらわれる類似を示す。

栄花物語(2)	定家本系家集	日記歌
廿日のほどより、例の三十講行はせ給ふ。五月五日にぞ五巻の日にあたりたりければ……	土御門殿にて、三十講の五巻、五月五日にあたれしに(60)	三十講の五巻、五月五日なり。けふしもあたりつらむ提婆品をおもふに……(一)
池の篝火に御燈の光ども行き交ひ照り勝り、御覽せらるるに、菖蒲の香も今めかしう薫りたり。暁に御堂より局／＼にまかづる……	その夜、池のかがり火に、御燈明の光り合ひて、昼よりも底までさやかなるに、菖蒲の香今めかしう匂ひ来れば(67)	いけの水の、たゞこのしたに、かゞり火にみあかしのひかりあひて、ひるよりもさやかなるを見、おもふことすくなくば(二)

以上のように考えるならば、首欠説の論拠(二)も確たる説得力を持つものではないことが明らかとなる。

## 3

『栄花物語』との関係については、秋山虔氏が石村正二氏の説を、

(一) 個人の文章 (おそらく女性の) を原拠としている、(二) 紫式部集との文章の一致がある、(三) 紫式部日記を原拠にしてかいた後の部分と類似した記述態度がみられる、(四) 紫式部日記にみえる式部の感懐と同様な心情が語られている、と整理・紹介した上で、「原拠に紫式部日記を想定されるのが至当であると論断されたのは傾聴に値すると思う。要するに栄花物語との比較は、紫式部日記の首欠説に有力な論拠を提供するといえるだろう」と言っている。しかしながら、これらの点については萩谷朴氏の見解をより妥当とすべきであろう。氏は『栄花物語』と『紫式部日記』『定家本系家集』『日記歌』との類似箇所十四をあげ、「『栄花物語』の法華三十講五巻の日に關するこの文章は、紛れもなく紫式部の文章を粉本としてしていると断定してもよいほどに、現行本『紫式部日記』や『紫式部集』の本文と、その発想・手法において共通した性格と、具体的に一致した修辭・表現とを具有しているのである」として石村氏の指摘の大方を認めつつも、そこから反転して、「特殊な常套語彙・習性的な觀察癖・即興的な感受性・対人意識や処世觀に至るまで、『栄華物語』のこの一文と、『紫式部日記』の文章とは、共通するところがあまりにも多い」とし、「もし、紫式部が、仮想される『広紫式部日記』という一つの作品の中で、寛弘五年五月五日の条に、このような文章を既に用いた上で、さらに寛弘五年八月以降の部分に、それと類似共通する文章表現をこれほど頻繁に重ねて用いたとしたら、鑑賞眼・批評力のある読者は、その類型的な陳腐さに直ちに気づき、作者の語彙の貧しさ・文章技術の単調さを非難するであろう。△中略▽紫式部ほどの作家が、一つの作品の中で、読者に

直ちに看破されるような、陳腐で類型的な文章を頻繁に繰り返し使用するとは思われない」とするのであるが、氏の言うように、類似箇所の頻出が、逆に両者の特殊な關係、すなわち一方が他方に無条件に依拠したものでないことの論拠たり得ることは、殊に『栄花物語』の場合、十分に考え得るところである。

『栄花物語』の編纂者は、中宮彰子出産前後の模様を記録するために、その資料として『紫式部日記』を何度か読んだであろう。資料採用の可否、『日記』記事の選択採録のために、繰り返し、相当真剣にこの『日記』に接した筈である。私たちの日常経験に照らしても、ひたむきに接した書物から影響を受けて、自然に文体・着眼・感覺等が類似してくるということは十分にあり得ることであって、『栄花物語』に見える五巻の日関連記事の『日記』との類似の因を、ここに求めることもできるように思う。

また、現存『日記』中、『栄花物語』に収録された歌は、次の四首のみであるが、「おほかりし……」が半公的な場での詠出であることを除けば、他の三首は何れも暗れの場における賀歌である(但し、「あしたづの……」は道長の作)。

(183)

。いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

(202)

。あしたづのよはひしあらば君が代の千歳のかずもかぞへととりてむ

(203)

。おほかりし豊の宮人さしわきてしるき日かげをあはれとぞ見し  
(217)

右四首の中で特に注意すべきは「めづらしき……」である。『紫式部日記』ではこれを、

「四条の大納言にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ、用意いるべし」など、ささめきあらそうほどに、こと多くて、夜いたうふけぬればにや、とりわきても指さでまかてたまふ。

(183)

と、結局献詠せずに終わったことを記しているのだが、『栄花物語』では、

珍しき光さしそふ盃はもちながらこそ千代をめぐらめ」とぞ、紫さゝめき思ふに、四条大納言公任簾のもとに居給へれば、歌よりもいひ出でん(程の)声遣ひ、恥しさをぞ思へかめる。かくてことゞもはてゝ……

と、実際の献詠の有無を腫化しながらも、この歌を採用・収録しているのである。このような採録状況は、式部作の賀歌が全て『栄華物語』に取り上げられることを示している。つまり、『栄花物語』の作者は、紫式部の詠出した賀歌を全て収録しようという方針を持っていたことがここで確認されるのである。『日記』中、他に賀歌と考えられるものは、「紀の国のしらの浜にひろふてふこの石こそはいはほともなれ(64)」だけであるが、これは播磨の守が碁の負けわざをした時、その洲浜のほとりの水に書きまぜてあったもので、慶事(若宮誕生)の予祝としての意味が付与されていると考えられるが、作者・伝来とも

に未詳であって、その前後の記事とともに、『栄花物語』には収録されていない。式部の作ではないので、これは当然の処置と考えられる。

このように『栄花物語』作者の編纂態度を考えると、仮に『栄花物語』が『広紫式部日記』に全面的に依拠したとするならば、定家本系家集(66)「妙なりや今日は五月の五日とて五つの巻の合へる御法も」、(67)「かがり火の影もさわがぬ池水に幾千代すまむ法の光ぞ」両歌に相当するものが採用・収録されていない事実は如何にも不自然なことである。殊に(66)は、「日記歌」(一)の詞書も合わせて考えるならば、道長家礼讃の姿勢・主題が「めづらしき……」「いかにいかが……」に全く共通するものであって、これが『栄花物語』に収録されていないということは、『栄花物語』の依拠した『紫式部日記』には、三十講五巻の日の記事が無かったことを物語っているとしか考えられないのである。

あるいはこの箇所、依拠すべき主要資料を持たず、『栄花物語』作者自身が自らの備忘録か記憶に頼って執筆したかとも考えられるが、全く他の資料を顧みなかったわけではないことは、定家本系家集(66)(67)の詞書に相当する記述の存在から推定されるのであって、その依拠した資料は、前項でも触れたように、定家本系家集増補者が依拠した小品「日記的小家集」に非常に近いもの、あるいはそのものであったろう。その際、原資料に記載されていた歌には、この場合関心が払われず(『日記』とこの小品との性格の相違によるため)、専ら詞書の記述から史書編纂に必要な事実だけが採録されたものと思われる。なお、(66)(67)の詞書に相当する記述が、『栄花物語』中何程かの距離をおいて



記されている（日本古典文学大系本で二十三行の間隔がある）事情は、家集の詞書の「その夜」と同一か、あるいはそれに近い語が原資料に記されてあって、<sup>(26)</sup> 6から7への時間の経過をその語によって了解した作者の、編纂上の配慮によるものであろう。

以上のように考えるならば、首欠説の論拠<sup>(25)</sup> 八三〇もまた、説得力を失うこととなるのである。この問題については、今小路覚瑞氏の「栄花物語を通して現存の紫式部日記を推定する時、すなわち現存紫式部日記の寛弘五年の日記形態はおそらく紫式部日記成立当時の原形、もしくは原形にほぼ近いものであって、現存日記の冒頭は原形の日記の冒頭通りであろうと信ずるのである」ということばを、もう一度噛締め直す必要があるように思う。

4

了悟の『幻中類林』「光源氏物語本事」の中に、「大齋院選子内親王へまいらせらるゝ本紙梅の唐紙うす紅梅のへうし也」という条と「おほかた先蹤をおもはへたらんにはへうしも梅の文たるへきにや」という条の間に次の一文が見える。

左衛門督とのゝ  
むめのはなさきてのゝちのみなれはやすきものとのみ人のい  
<sup>(26)</sup> ぶん  
と家の日記にみえたり

この一文について、稻賀敬二氏は次のように言う。<sup>(27)</sup> まず、「これは

『左衛門の督』の『家の日記』ではなく、紫式部の『家の日記』であり、『左衛門の督はその中の登場人物、『梅の花咲きての後の』の歌は左衛門督が日記の中のある場面で口ずさんだものと解される」として、①これを紫式部日記の逸文として認定し、その本来あるべき位置を、所謂消息文の後に続く、年時不明とされる三断章のうち、次の段の後に接続すると推定する。

源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧じて、例のすずるなることも出できたるついでに、梅のしたに敷かれたる紙にかかせたまへる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

たまはせられたれば、

人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ

めざましう、と聞こゆ。<sup>(249) (250)</sup>

次いで、②それに続く推定される「むめのはな……」の歌の意を、「あなたは『誰か、口ならしけむ』とおっしゃるが、お答えするまでもなく既に古歌にあるじゃないか。『梅の花咲きて後の身(実)』だからに決まっている。しらばっくれてもだめですよ」と解釈する。そして、③この左衛門の督を、「当意即妙に古今集の歌を引いて軽口をたたき、紫式部をからかうことのできる」点から、頼通（寛弘六年三月四日以後長和三年教通に代わるまで左衛門の督）<sup>(28)</sup>ではなくて、公任（長保三年十月三日以後頼通に代わるまで左衛門の督）であろうと推

定し、そこから④この記事は、「寛弘五年の、『梅の実』の熟している六月頃、乃至はその年以前の同じ季節」のものになるとするのである。氏の推定に従えば、現存日記冒頭部以前に、それに先行する記事が存在したことになるわけである。しかし、氏はこの部分の記事を「寛弘五年分の記事の素材として集積されていた諸断片」の一つと考えているのであって、如上の推定をよりどころとして、これまで批判・検討してきたものと同一線上での首欠論を主張しているのではない。氏はこの論考の結びで、「私は、紫式部日記全体が、実はある意味での断片・断章の集積であるという見方をする。寛弘六年にも、そして寛弘七年三月以後にも、繰返し彼女は、あまり気乗りはしないものの、その断章・断片の整理をこころみた。しかし結局意に満たぬまま、作業を放棄したと考える。その結果、後人がこれを書写して伝える時、断片集積の原形に近い広本形態の本と、比較的整理された形のみを残そうとする撰択意識に支えられた形態の本との両方が流布した」と言うのだが、この結論に到る出発点として、この「光源氏物語本事」中の一文の問題があること、また、所謂消息文に続く記事の形態上の扱いをめぐってこの問題が密接な関りを持っていること、そして何よりも、この一文を含む記事の年時が現存日記の冒頭部以前として推定されていることなどを理由として、以下に氏の論の検討を進めてみたい。

実は氏の論に対する根本的批判は、岡博士によって既に完了してしまっている<sup>(29)</sup>と言っても差し支えないと思われるのであるが、以下博士の論に添いながら、些かの私見を添えていきたい。

博士は、稻賀氏の推定①については賛意を表しながらも、②の歌の解釈については、真淵・宣長らの解釈を紹介して、「あなたがたの本歌としておられる「古今集」の誹諧歌は『梅の花の艶に咲いたのちの実みたいな身だから、世間の人が私のことを粋だ、粋だとばかりいうのでしょう。好色者なんて、飛んでもない誤解でしょう』と解釈し、形勢不穏と見た左衛門の督が両者をとりのとったものと言うのである。この、歌の解釈ということが最も問題となると思われる。私は「すきもの」(酸き物)<sup>(30)</sup>のもう一方の意については、「好色者」の意にとるのが自然である<sup>(30)</sup>と思うのだが、そうすると次のような疑問が生ずるのである。まず、道長が「すきもの……」と詠いかけたときには既に、古今集に収載され、人口に膾炙していた筈の「梅の花咲きてのちのみなればやすきものとのみ人のいふらむ」が想い起こされ、それが踏まえられていた筈であり、道長の歌を承けた式部も、そのようなことは十分承知した上で空とぼけた歌を返した、というのがこの贈答の実相であった筈である。それを、如何に道長の御機嫌のためとは言いながら、「四条の大納言にさしいでむほど、歌をばさるものにて、声づかひ、用意いるべし」と、女房らにまで畏敬されていた当代随一の風流才子公任が、当時者同士の承知している典拠を、ここで殊更に暴露するような愚を犯すであろうか。氏は、「この左衛門の督のことばは、まことにつばを心得た発言のように思われる」と言うが、これは寧ろ、実に間の抜けた、時宜を心得ぬ発言と言わざるを得ない。

次に、氏は「公任にはこの外に、『このわたりに若紫やさぶらぶ』

と、やはり源氏物語をふまえて紫式部によびかけた有名な実績も、既に紫式部日記に見えている。それとこれとは共通した雰囲気が流れている」と言うが、その時の式部の反応は、「源氏にかかるべき人も見えたまはぬに、かのうへは、まいていかでものしたまはむと、聞きゐたり」と、聞き流し、公任を無視しているのであって、ここに「共通した雰囲気が流れている」とは、とても言い得ないのである。「すきもの」を好色者の意にとると、このような疑問が生じてくるのであって、「むめのはな……」の歌が日記前掲記事の後に続く必然性が、それほど強く感じられないのである。この歌が、前掲記事に確かに接続していたかどうかについては、更に検討を要する問題であるように思われる。

しかし、これだけの短い部分であるので、それだけに多くの可能性を同時に有するものであることは否定もできず、この一文に関しては、種々の事情が推量し得よう。そこで、仮に氏の推定①を承認するとしたなら、その意味・解釈は、氏が②・③・④と展開した臆測よりも、寧ろ岡博士の考察の方が妥当に思える。博士は、「すきもの」について、「真淵は『続万葉論』のさきにあげた条のなかに、『……おのれ聞惣て大かたに物を好をばすくといはず。甚そのことに執するをいふなり』と批評している」という点、及び「秋永一枝さんの『古今和歌集声点本の研究(資料篇)』<sup>五八</sup>頁に『寂惠本古今和歌集加注』および『畏沙門堂本古今集註』が表出しているが、そして(1)(寂)『□<sup>ツカ</sup>メスケレバ ソノミナレハヤスキモノトハ人ノイフラムト ソヘテヨメルナリ』、(2)(昆)『註・梅子ノ酸ニ風情ノ数奇ヲソヘタリ』〔懸〕酸き物

×『好き者』とある」点から、「粋だ、粋だ」と訳している。訳語が十分こなれていない憾みは残るが、「道長の冗談がすぎて、紫式部をいからせてしまったので、それを和訳させて、一座の空気をしらけさせないで、なごやかにしたのは、多分左衛門督の『むめの花咲きの後』の『古今』の誹諧歌の朗誦であろう。そしてこの一二句の意味するところは、『源氏物語』を書き終えてのちの身なればということであらう」とする。この場面、そして、場面に即した古今歌の深い読みが用い、式部もその用法をそのまま受け入れた「好色者」としての意を、その本来あるべき意としての「好き者」の意に据え直して、その場をうまく収めたのが左衛門の督であったということである。そうすると、この左衛門の督は公任よりも、寧ろ頼通が相応しく思われる。頼通は、寛弘五年七月の「しめやかなる夕暮に……」の段に、

年のほどよりは、いとおとなしく心にくきさまして、「人はなほ、心ばへこそ難きものなめれ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、をさなしと人のあなづりきこゆるこそ悪しけれと、はづかしげに見ゆ。うちとけぬほどにて、「おほかる野辺に」とうち誦じて、立ちたまひにしさまこそ、物語にほめたる男のこころちしはべりしか。(164)

と記されている。博士はこの部分を引用して、「紫式部の眼からみた当代の最も理想的な貴公子である。その貴公子が『梅の花さきての後の実なれば』と誦したのだから、中宮をはじめ一座のひとびとをハラハラさせた緊張が瞬間にとけ、君臣男女和気あいあいの状態になった

さま、目に見るようである」と言うのであるが、従うべき見解と思わ  
れる。

したがって、左衛門の督を頼通とすると、この部分を含む記事の年  
時について、稻賀氏のような推測を生む必要が消滅することになるわ  
けで、間接的首欠論という体ではあったが、氏の説も十分な説得力を  
持ち得ないという結論に至らざるを得ないのである。

## 5

これまで、首欠説の主要論拠四点について、逐一批判・検討してき  
たわけであるが、その結果言えることは、何れの論拠も、それ自体で  
は十分な説得力を持つものではないということである。しかしながら  
ら、それらの全くの否定ということも、各々の箇所では慎重に避け  
てきたつもりである。それは、全くの否定を許さぬ力が、各々の論拠  
には未だ存在しているからである。これは、全く資料の稀少のなす所  
以であると思う。首欠説・非首欠説の正否を明確に判定し得る十分な  
材料が、我々の前には未だ出揃っていないのである。

手元にある材料が稀少であり、しかも限られたものであるとき、そ  
れをもとに考えを組立てるには、あくまでも慎重を欠いてはならな  
い。しかし、慎重な態度を一方では持しながらも、同時にもう一方で  
は、それらの材料を用いて考えられることは全て考えておく必要があ  
るだろう。あらゆる可能性を探る必要がある。私が想定した、「紫式  
部自身の手になる、同一素材を持ちながら、相違する二つの主題（或

いは編纂意図）を持つ、寛弘五年五月五日から六日にかけての日時を  
示す二つの小品「日記的小家集」は、その産物である。首欠説の論拠  
△一▽△二▽△三▽は、同時に私の想定を可能にするものであり、こ  
の想定に従うならば、首欠説は逆に解消への方向に向かわざるを得な  
くなる筈である。しかし、敢て言うなら、これも可能な一解釈であろ  
う。この説を強力に主張するには、未だ資料が不足であると言える。  
私自身の考察の限界をも、ここで確認しておきたい。

外部徴証からする首欠説の批判・検討の結びにあたって、それぞれ  
の論拠は、各々可能な一解釈なのであって、それ自体で十分な説得力  
を持つものでは決してないのだ、という点を再度確認しておきたい。  
真実の姿により近づくためには、さらに他との連合を待たなければな  
らないであろう。

## 6

さて、そこで現存日記の冒頭部に目を向けてみたい。現存冒頭部が  
その位置に相応しいことは、先にあげた岡博士・益田氏の両見解に言  
う通りであって、殆ど異論なからうと思われる。冒頭部としての範囲  
は、一般に考えられているように、「……たとしへなくよろづ忘らる  
るも、かつはあやし」までを一まとまりと考える。この部分は、日記  
全体の序としての性格を付与しようという意図のもとに執筆されたと  
考えられるのであるが、以下、この点について述べることによって、  
現存日記冒頭部がその位置に相応しいことを証し、本稿の結びとした

い。

秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなくをかし。池のわたりのこず多ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色つきわたりつつ、おほかたの空もえんなるにもてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ水のおとなひ、夜もすがら聞きまがはさる。

御前にも、近うさぶらふ人々はかなき物語するを聞こしめしつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせたまへる御有様などの、いとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまゐるべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘らるるも、かつはあやし。(161)

現存日記冒頭の一まとまり(以下、これを冒頭部と呼ぶ)は四つの文によって構成されているが、各々の量・内容・表現は同一ではない。初めの一文は、秋色の立ち初める季節という時間的的定位と、土御門殿という空間的的定位とをなして、両者の融合調和を概述する、極めて簡潔な一文である。これに対し、第二文前半(「……えんなるに」まで)は、第一文の内容を承けて具体的に詳述し直すものであり、両者の関係は、例えば総論・各論のように緊密なものであって、ほぼ同体と見なすことができる。そこでは、まず素材として「池のわたりのこず多ども」「遣水のほとりのくさむら」という自然の景物を取り上げ、その両者を「おのがじし色つきわたりつつ」と叙すことよって、「秋

のけはひ入り立つ」具体相を叙述し、次に遠景として、天候・気象を対象とした「おほかたの空」という第三の素材をとりあげ、それも「えんなるに」と描写することよって、第一・第二の素材と融合調和し、或いは映発し合う光景を導き出して、「いはむかたなくをか(き)」土御門殿の視覚的情况を描出しているのである。第二文の後半は、それら前半に表現された土御門殿の視覚的情况に「もてはやされて」(31)「不断の御読経の声々」という第四の素材を持ち出してきて、それを「あはれまさりけり」と結んでいる。ここでは、前半の視覚的情况描写から聴覚的描写への移行が見られ、その移行、あるいは発展を支えている語が「もてはやされて」である。自然の景物も、読経の声も、ともに身に沁みる風情を誘うものとして扱われているのであって、両者がこの語によって結びつけられていることは、この場合自然ではない。第二文は、第一文を継承しつつも後半に新たな要素を付加し、それをもって結びとしているのである。

第三文は、「風のけはひ」という触覚的要素が加わるのだが、文末は第二文同様、「聞きまがはさる」と、聴覚的に収束している。この点は重要であって、第三文が、第二文のように前文を承けて更に発展するのではなく、逆に、まず新たな要素を提示し、そこで表現された情況の下(「やうやう涼しき風のけはひに」)、前文と同質(聴覚的)異種の新素材(「例のたえせぬ水のおとなひ」と「不断の御読経の声々」とが絡み合う形で文末が結ばれるという表現の相は、これ以上の発展、あるいは継承を自ら断ち切る体のものであると言えよう。この点は、冒頭部を前後二段に分けると、前段の末尾をこの位置に見る

根拠ともなろう。

第四文は、前段第一・二・三文の和にほぼ等しい量であって、内容は、前段が自然を主として対しているのに対して、人事を主としたものとなっている。ここでとりあげられているのは、中宮の「御有様」であり、前段が「土御門殿のありさま」であったのと、よく照応している。この段で重要なことは、中宮の「さりげなくもてかくさせたまへる御有様など」を叙した後、式部が自身の心情を直叙している点である。まず、「うき世のなぐさめには……たとしへなくよろづ忘らるる」と言っているのだが、ここでいう「うつし心」とは、「現心」であって、家集に見える式部の心情とか、「うき世のなぐさめには」という表現、また、日記中随所に見られる記述等から、これは「憂愁に暮れる心情」と解釈するのが妥当であろう。そのような、自己の心の内に宿る憂愁を「ひきたがへ」、「たとしへなくよろづ忘らるる」現在の心境を、式部は「かつはあやし」と客観的に、極めて冷静に見つめているのだが、この表現は同時に二つの意を有していると考えられる。一つは、「日ごろのふさいだ気分とはうって変わって、たとえようもないほどに、おのずと小さいの憂鬱が忘れられてしまふ」<sup>(32)</sup>自己の心情の転位の様相を静かに見つめて、それを訝しむ理性の独語としての意味であり、他の一つは、前意を踏まえて、そのように自ら訝しまずにはいられぬ程に常の憂愁を忘れさせ、この御方のためならば身命を投げうってでも奉仕しなければならないと式部自身に思わせてしまふほど素晴しい方が、この御前なのであるという、中宮礼讃姿勢の強調法としての意味である。前者は、式部が自分自身に語る体のものであり、ここに

彼女の内省的傾向を見ることも可能である。それに対して、後者は修辭的効果を狙った表現法と解し得るものであり、読者に対する強い意識を読みとることができる。ここで大切なことは、式部の本心はどこらであるかということ穿鑿することではなく、一つの語が同時に二つの意味・機能を持つこと、すなわち一方は自己に向かつて、もう一方は他者（読者）に向かつて表現が投げられていることである。この場合、内に向かう意は暗く、外へ向かう意は全く逆に明るい色彩を帯びさせられている。用語にあらわれる、このような意味の二重性の有りようは、既に家集と日記歌との比較の折にも触れたことがあるが、これはかなり高度な表現技巧である。そして、このように内外に対する二重表現を含んでいるということ自体が、冒頭文の序文としての性格づけに寄与するものであった。

ところで、このような表現の二重性は、冒頭部中この箇所のみに見られるものであろうか。前段について、この観点から再検討してみると、第三文が最も問題になると思われる。まず、「例の絶えぬ水のおとなひ」であるが、ここで想起こされるのは、家集<sup>100</sup>の少少將の君との贈答である。ここでは、遣水の水面は、紫式部の姿を映し出すことよって彼女の憂愁を募らせ、その滝の音は、彼女の頬を伝って流れ落ちる憂き涙が添い加わって、恨みがましく響くものとして詠まれていた。特に、結句「滝の音かな」からも分かるように、この歌の主眼は遣水の流れる「音」にある。式部にとって、憂愁の情と遣水の流れ（音）とは、その心の奥底で深い繋りをもって結びつけられていたのである。そのような遣水の流れが、日記では「例の絶えぬ

ぬ水のおとなひ」として表現されている。「例の」は、「いつもの」の意であるが、あるいは、家集例の詠出を意識しての言葉であるのかもしれない。しかし、それは式部自身にとつてのみ了解される用語であった。「絶えせぬ」は、後段「うつし心」の「うつし」に、意味として照応する。「絶えせぬ」は、絶えない・不断にある・持続し続ける意であり、「うつし（現）」は、その語根ウツが「この世にはつきり形を見せ、存在する意」（岩波古語辞典）であるところから、『紫式部日記新釈』の説くように、「平常、通常」の意と考えてよいから、両者の意の基底には共通のものが含まれていると言える。両者の否定意義が、中絶・停止・非存在・死に連なるものであることから、このことは逆検証されよう。「例のたえせぬ水のおとなひ」は、後段の式部の憂愁に沈む「うつし心」を暗に喩えているものと考えられる。

次に、「夜もすがら聞きまがはさる」について見ると、「聞きまがはさる」もう一方のものは、「不断の御読経の声々」と文脈から読み得る。この語は前述したように、土御門殿の自然の景物に引き立てられて新しく登場した語であり、文末で「あはれまさりけり」と詠嘆終止されているように、特に扱いの重いものであった。第一文・第二文前半は、この句の登場を導く前奏であったとも言えるほどである。この不断経の読誦は、後段に登場する中宮の安産祈願のためのものであり、「不断の御経の声々」は、道長の権勢・栄華を確固不動のものとするための最大の条件である、彰子腹からの皇子誕生を切実に期待し、それに全てをかけている土御門第の人々の、この一事に託した熱い願望を象徴している。そしてその思いは式部として例外ではないので

あって、後段に見られる「たとしへなくよろづ忘らるる」心情もまた、既にここで暗喩されているのである。

このように、「不断の御読経の声々」と「たとしへなくよろづ忘らるる」心情傾向、そして「例の絶えせぬ水のおとなひ」と「うつし心」との照応が、前後両段に亘って見られるということは、前段の聴覚的交錯を表現する記述（第三文）が、後段に記述される式部の心情・精神の実相を予め暗に喩えて表現していたものであったことを物語るものであり、先に後段に見られる表現の二重性について述べたが、ここで前段にも類似の性格を見ることができるのである。なお、「聞きまがはさる」は些か尋常ならざる語法であり、『紫式部日記新釈』が「聞きまがふ』『聞きまがへらる』『音しまがはず』といった意味の混淆して出来た形であろう」と言っているように、『新釈』のあげる語例のどれにも置換できず、そしてどの意味をも含んだものとして使用されていると言える。「Aとして聞いていたものが、いつのまにかBとして聞こえてきて、遂に両者が交錯し、その判別も思うようにつかなくなる」状態にさせられている、とここでは言っているのである。それは「暁がたになりければ、法華三昧行ふ堂の、饑法の聲、山おろしにつきて聞える、いと、尊く、瀧の音に響きあひたり」（『源氏物語』<sup>34</sup>「若紫」）に見られるような、二つの音の響き合う様相とは全く異なった状況であって、この点からも、この表現の特異なことが認められる。あるいは、この語は後段の「ひきたがへ」「かつはあやし」と緩やかに照応しているとも考えられようか。

以上に見てきたように、冒頭部の両段はそれぞれ、内容として自然

・人事の対照を有しつつ、同時に表現・意味についても照応関係を持つものであると言える。特に、後段に記された式部の心情の転移の相、及び屈曲内向しがちな精神の実相が、前段で自然の聴覚的交錯の裡に、既に隱喩法を用いて表現されていることは重要である。

では、何故に式部は「内向する憂愁」から「中宮への奉仕・礼讃の姿勢」への転位（後段）、あるいはその両者の交錯（前段）という彼女の精神の現実相を両段で繰り返し記さなければならなかったのだろうか。それは、日記全体の記述に目を転ずる時、自と明ら<sup>おぼや</sup>かとなる。所謂消息文を除いた、この日記の形態をごく大まかに言うなら、まず公的行事の記録があつて、その後、それら外部の世界を凝視する眼によって反映された式部の内面相の告白があり、そこからまた自己の外部の世界の記述に立ち戻るといふ相を呈しているのである。そして、外部世界の記述は、それへの讚美の色彩の濃いものであるのに対して、内面相の告白はそれとは逆に憂愁に満ちたものである。このように、その記述対象が①↓②↓③↓④↓…と相互に往復しつつ、同時にその色彩は①↓②↓③↓…と反転しながら記述が展開されるといふのがこの日記の形態の実際であるが、これは、式部自身が冒頭部で「かつはあやし」と嘆ずることによって自ら表明している、自身の精神構造と全く共通したものであるように思われる。書くという行為が、書く主体の精神の実相を否応なく発露させてしまう力を内在させているとするならば、書かれた日記の形態と、式部が自ら告白する精神の姿とが類似・共通してしまふことは、当然あり得べきことである。式部は、「現実」とか「事実」とかを最も支えにして「書く」といふ行為

を維持し得た作家であるが、彼女自身、それは十分自覚もし、また右のような「書く」行為自体に内在する力をも、既に承知していたのであろう。そこで、日記執筆にあたって、彼女は自分にとって最も相応しい執筆方法・形態をとろうとしたのである。式部はそれを冒頭部で自ら表明しようとしているのである。無論、それは直接の表明ではない。自己の外部世界と内部世界との交錯した叙述、讚美と憂愁（あるいは現実志向と現実拒否）との錯綜した記述展開を自ら予想し、そのような形態・方法に身を委ねて執筆していくことを、「不断の御読経の声々」と「例の絶えせぬ水のおとなひ」が交錯して聞こえる様に仮託し、憂い「うつし心」と「たとしへなくよろづ忘らるる」心が「ひきたがへ」られ、それを「かつはあやし」と見る精神の実相に収束・象徴させて、表明しているのである。

以上のように冒頭部の表現の意味を考えるならば、作品執筆の方法・形態の表明という機能が付与されていることから、その構成上に占める位置は、序文としてのそれが最も相応しく、また、作品の起筆としての風致を具備している点も考え合わせると、現存冒頭部をもってこの日記の序文とすることが、最も妥当であると考えざるを得ないのである。

△付記▽最近の『紫式部日記』研究の関心は、現存日記に先行する記事の存在確認と、その処理をめぐってに集中している観がある。しかし、「晝景氣」に該当する記事・「日記歌」の原拠になつた記事等が確かに存在し、また所謂消息文以後の「十一日の晝」



に始まる段と、それに続く二つの断章が現存冒頭部に時間的に先行するものであり、さらに稻賀氏の言う逸文資料がそれに続くものであることなどが確認されたとしても、もはやそれらをもって短絡的に首欠・竄入・錯簡問題には結びつけ得ないであろう。むしろ、何故に現存日記からそれらの記事が脱落し、あるいは排除されたのか、またどのような経緯・論理によって現存形態としてあるのかを、作品の内部検討を主軸としつつも、外部資料との相関の検討をも含めて総合的に考えなければなるまい。

忘れてならないのは、始発は常に作品であるということだろう。論理が、対立説の矛盾解消・合理的解釈のための恣意的操作に墮すことは、最も忌むべきである。合理の名のもとに、いかに屋上屋を重ねたとしても、それは作品から遠のくばかりである。

現在の『紫式部日記』研究の方向は「日本古典文学大系」『解説』によって導かれたものであろうが、時にはそれ以前に立ち戻ることとも必要なのではないか。本稿は研究最前線から見れば、やや遅れても見えるが、私なりのこだわりからは遂に脱し切れないのである。

## 注

- (1) 萩谷朴『紫式部日記全注釈』、秋山虔(岩波文庫「新版」)、野村精一『源氏物語文体論序説』所収「紫式部の文体」らは、これを八月のこととする。
- (2) 小沢正夫「紫式部日記考——日記歌による日記の原形推定は不可能なるか——」国語と国文学(昭11・11)、池田亀鑑「紫式部日記歌と家集について」

て「学苑一五三号(昭28)など。

(3) (2)に同じ。

(4) 今小路覚瑞『紫式部日記の研究』(昭9)、△新訂版▽(昭45)。

(5) 石村正二「紫式部日記の原形と現存形態(上)——その首欠部分について——」国語四一(昭30)、小沢正夫前掲論文など。

(6) 今井源衛「源氏物語の研究」(昭37)所収復刻資料「光源氏物語本事」による。

(7) 稻賀敬二「紫式部日記逸文資料『左衛門督』の『梅の花』の歌——日記の成立と性格をめぐる臆説——」国語と国文学(昭46・4)。但し、氏はこの点によって直線的に首欠を推定するのではなく、この記事を含む、所謂消息文以後の三断章について、これを混入と考え、その理由を消息文の成立事情と、それに用いられたと推定される反故紙との関係から説明している。

(8) 『増訂源氏物語の基礎的研究——紫式部の生涯と作品——』(昭41)所収「紫式部日記」の原形とその成立年代。△引用文は現代仮名遣に訂した。以下全て同じ▽

(9) 『紫式部日記の新展望』(昭26)所収「紫式部日記の成立」。氏は同書で次のように言う。

こうして紫式部日記現形が偶然に回想を繰り展げているのではなく、この日記全体とっての出発として、この日記全体の大きな回想の発想としてこの現形冒頭部分を有することが明かである。我々は、このような回想の発想以前に別の具体的な回想があり得るとは思えない。よし、紫式部は以前に日記を記していたとしても、新たに中宮御産の頃から回想的に記録しようとするこの一卷とは一応別書なのである。

故に式部にこの日記と同種類の、しかもこの日記直前の時代を扱った日記若しくは回想録があるかないか、という問題は有り得るかも知れないが、この日記の首部が残闕非残闕の論議の対象となる事は先ず有り得ない事である。

- (10) 〆日本古典文学大系〱『紫式部日記』(昭33)「解説」。
- (11) (2) に同じ。
- (12) 『建礼門院右京大夫集』に次のような一節が見える。  
返々々きよりほかの思ひ出でなき身ながら、年はつもりて、いたづらにあかしくらすほどに、思ひ出でらるゝ事どもを、すこしづつかきつけたるなり。おのづから人の、「さる事や」などいふには、いたく思ふまゝのことかはやくもおぼえて、せうせうをぞかきみてせし。(久松潜一・久保田淳校注〆岩波文庫〱)
- (13) 国書刊行会『明月記』第三(昭45)による。
- (14) (8) に同じ。
- (15) 『紫式部日記全注釈〆上・下〱』(昭46・48)。以下同氏の説の紹介・引用は全て同書による。
- (16) 近藤潤一「斎院——式子内親王」国文学(昭50・12)。
- (17) 樋口芳麻呂「憧憬と憂愁」式子内親王論」国文学(昭45・10)。
- (18) 南波浩「紫式部日記の変貌」〆古代文学論叢第五輯所収〱(昭51)
- (19) 久保木寿子は「紫式部集の増補について〆上・下〱」国文学研究(昭52・3、6)で、(6)〆(7)には「ままとりとして後人の増補が認められる」と言う。
- (20) 「日記歌」追補の段階で、既に(6)は増補されていたものと考えられる。(7)は(6)の「返し」なので、それを省略した残りの五首が「日記歌」(一)〆(四)として古本系家集末尾に追補されたものと思われる。
- (21) 前掲「光源氏物語本事」に、次の記事が見える。  
宰相入道頼隆は大炊御門斎院<sup>聖内</sup>御本に譜巻と侍るをみれば系図也とつけ給つたへたり
- (22) 松村博司・山中裕校注〆日本古典文学大系〱『榮花物語〆上〱』(昭39)による。以下同じ。
- (23) (10) に同じ。
- (24) 本歌及びその意味については、『紫式部日記全注釈〆上〱』に詳しい。
- (25) 前掲同書所収「紫式部日記の原形について——榮花物語初花巻と寛弘五

年の日記原形——」。

- (26) 「古今和歌集」巻第十九「雑躰」1066「題しらずよみ人しらず」。
- (27) (7) に同じ。以下同氏の説の紹介と引用は、全て同論文による。
- (28) 新訂増補国史大系「公卿補任」による。公任についても同じ。
- (29) 「十一日の暁」平安朝文学研究(昭47・8)。以下本項における同氏の説の紹介・引用は、全て同論文による。
- (30) 窪田空穂「古今和歌集評釈」〆新訂版〱(昭35)の「評」は次の通り。  
好色者という詞から、「酸き物」を連想し、それとしては、人の愛好している梅の花の後身である梅の実を捉えたもので、地口の可笑しさに、好い気の伴なっているところが、当時の人の放笑を誘ったであろうと思われる。
- (31) 曾沢太吉・森重敏「紫式部日記新釈」(昭39)は「もてはやされて」を、「ここでは、梢や草むらの秋色が、空の色に映発しているという意(釈・考証)。御説経の声々が空の色に引き立たせられるのではない」と解しているが、接続の関係から考えるなら、「あはれまさりけり」を修飾すると解するのが自然であろう。
- (32) 中野幸一校注〆日本古典文学全集〱『紫式部日記』(昭46)口語訳。
- (33) 前掲拙稿「古本系『紫式部集』巻末付載「日記歌」考」。
- (34) 山岸徳平校注〆日本古典文学大系〱本(昭33)による。
- (35) 拙稿「紫式部日記」寛弘五年の記事——小少将の君・大納言の君との歌の贈答記事を中心に——」物語研究(昭54・4)。

※『紫式部日記』の引用は、全て〆日本古典文学全集〱本による。但し、〆冒頭部〱については、その段落分けと読点の一部を私に改めた。引用文末尾( )内の数字は全集本頁を示す。